

サザンビーチ

2025. 3. 19

海は怖い。もともと福島盆地で育った人間である。そのため、山の民だと思っている。山に対しては安心感が先行するが、海に対しては恐怖感が先に来てしまう。海はきれいである。海への憧れもある。だが、怖さは拭いきれない。これは、震災前からそうだった。震災後は、以前にも増して現実感のある恐怖が襲ってくるようになった。

松川浦に行くことがある。松川浦大橋を渡ると、海沿いにまっすぐな道が現れる。海を見ながら気分よく車を走らせる。車を止め、海に向かう。砂浜の上を歩く。太平洋は、いつ見ても広く大きい。海はいいなあと思う反面、怖さもある。どうしても、震災のことが蘇ってしまう。直接、体験したわけではない。映像で見ただけである。にもかかわらず、気持ちよく海を眺めることなどできない。今まで訪れた被災地のことを思い出してしまう。

数年前になるが、茅ヶ崎、湘南、江ノ島方面に、何度か行ったことがある。茅ヶ崎の海は明るかった。サザンビーチは、同じ太平洋でも別世界だった。南に面しているということもあるだろう。だが、それだけではない。そこには、震災の爪痕はなかった。サザンビーチカフェには人が集い、砂浜では、ビーチバレーに興じている若者がいる。怖さの微塵もない。道路を挟んだ住宅街からは、自転車でサーフボードを運んでくる人が、当たり前のようにやってくる。湘南の海とサーフィンが日常なのである。烏帽子岩に江の島、そして富士山である。陽光に照らされた湘南の海は、海のすばらしさしか伝えてはくれない。何度でも行きたくなる海である。

今年の3月11日には、あえて何も綴らなかった。だが、日に日に、罪悪感のようなものが襲ってきた。決して忘れたわけではない。忘れることなどできない。何かに突き動かされるように、今、書いている。浜通りの海のことを考えていたら、その対照として、茅ヶ崎のサザンビーチが出てきた。湘南海岸の情景が浮かんできた。同じ海でも場所が変われば、その存在や見え方も違ってくる。

あれから14年である。もう14年とは思えない。まだ、14年しか経っていない。それなのに、殊の外、風化のスピードが早いように感じる。仕方がないことなのか。現住所は浜通りのままで、福島市にお住まいの方がいる。どんな思いで、3月を迎えているのだろう。子どもたちには、震災の実感はないだろう。

東日本大震災は特別なことだが、能登のことも気になる。復興のスピードがかなり遅いように感じる。輪島の朝市で生き生きと働くおばあちゃんたちの笑顔が蘇ってくる。日本各地に、いや世界各地に、様々な災害に遭われた方がいる。この3月は、改めて各地に思いを馳せるときである。